

ギリシア人は神話を信じたか

—— 世界を構成する想像力にかんする試論 ——

ポール・ヴェーヌ著 大津真作訳

(法政大学出版局叢書 ユニベルシタス 1985年, 2500円)

原題: Les Grecs ont-ils cru a leurs mythes? Editions du Seuil, 1983)

藤原聖子

1) 問題の背景

「ギリシア人は神話を信じたか」。一見唐突な題名だが、この問いが問題化するのは、

我々(特に宗教学者)が神話、信仰、古代ギリシアに対して一種の先入見を共有していることによる。——未開人は神話を素朴に信じ

だが、現代人はそれが虚構だと知っている。古代ギリシア人はこの中間に位置し、神話を伝承し神託を受ける一方で、神話批判やその合理的解釈も行った。これは非神話化・合理化の一環である。宗教学の最も早い前身がここにある。——ここから疑問が生じる。彼らは字句通りの神話とその合理的解釈を共に信じ、その間の矛盾には無頓着な特殊な心性を持っていたのか。彼らの信仰は生半可だったのか。

本書の意図は、この問いにYesかNoの決着をつける事ではない。それは、そもそも信じるとは何かということをめぐる、上にみたような我々の自明の先入見を突き崩すことなのである。

では本論の予備理解をかねて、著者を紹介したい。ポール・ヴェーヌ氏は、仏アナル学派第3世代の旗手の一人である。古代ローマ史が専門だが、従来の歴史主義を批判し、M. フーコーの影響をうけて構造主義的な歴史把握を試みている。あえて定式的に著者の理論の方向性を示せば、

◇反マルクス主義的歴史観、従って、

◇反西洋・理性中心主義（→歴史の相対主義）………反一元的-普遍的真理観（→多元的真理観）、

反心-身、理論-実践二元論（→力概念による一元化）となる。

本書は、ギリシア時代特有の信の様態、更には真理観、歴史観を顕わにしようとするモノグラフである。歴史記述にとどまらず、理論的考察も多々折り込まれ、素朴実証主義的な歴史 人間科学に対する批判のスパイスが随所にきいている。宗教学もその矛先から逃れてはいない。宗教学自身の議論の活性化にも、このような宗教学プロパー外への開放性が必要なことは、今更言うまでもないだろう。

2) 内容要約〔中心的な論点は、前半でほぼ語られている。〕

第1章 歴史の真理が伝承であり、流布本であったとき

現在の歴史学は、史料を、事実=真理の描写とみて、疑って調べる。古代ギリシアでは、事実と史料を区別せず、伝承・流布本=他人の言葉を信頼し、そこに真理を見た。歴史書に正当性を示す注はなく、一般大衆を読者とし、解釈や説明でなく〈報道〉を旨とした。

第2章 真理の諸世界の多元性と類比

現代人は、ギリシア人が詩人の語りの中の史実=真理=信の対象と、詩人の作り話=虚構を区別していたかどうかいぶかる。だが、両者の違いは客観的・普遍的には存在しない。真理は時代によって姿を変える。それを生み出すのは、一つの時代の世界（観）を構成する〈想像力〉（カントの構想力の批判的継承）である。従って、ギリシア人は非合理的なのではなく、我々が虚構とみなすものを真理とみたのである。現代の科学的真理も、人類史の特殊な一時期にのみ妥当にするにすぎない。

第3章 知の社会的分配と信の諸様態

ギリシア人は神話に伝承を認め、これを信じた。また、知の社会的分配は、民衆と歴史家で差別はなかった。その後ヘレニズム期に神話が信を失ったのは、他人の言葉への懐疑と、神話・知の専門家による占有化に因る。これを合理的意識の芽生えとする近代歴史学は、一つの図式・法則によって歴史を系統的に説明し、事象間は因果関係によって連続しているとみる。だが、歴史は〈発明能力〉（一種のエネルギー）が産む偶然の累積で、本来意味はない。意味や因果性があるようにみえるのは、事後的に一つの型にはめて解釈するからである。歴史学の課題は、その時代の文化的土台である真理プログラムを、あるがままに明るみに出すことである。

第4章 信の社会的多様性と頭脳のバルカン化

ヘレニズム以降の学者の多様な神話批判は、いずれも合理化ではなく、その時代に信を得るための根拠付け=神祕化である。彼らは、相容れぬ複数の真理——神奇を拒否する真理と他人の言葉に全くの嘘はないという真理——を同時に信じる上で、その間に意味上の一貫

性を求めたのである。この信仰様式は現代と変わらない。これはイデオロギーによる正しい認識の歪みではない。利害ではなく、偶然が真理と認識を規定するからである。日常生活は多元的真理によって構成され、宗教も政治も真面目に扱われている。逆に、宗教学者は宗教だけを特別視するが、これも日常に占める部分は少しに過ぎない。

第5章 この社会学のもとで——

一つの潜在的な真理プログラム

人の言葉に全くの嘘はなく、必ずもとになった事実がある。認識内容と媒体は一体である。これらが、この時代終始一貫した真理プログラムであった。

第6章以降では、神話に対する様々な態度が挙げられる。年代記やアレゴリーによる解釈。修辞学や、政治的辞令としての神話。懐疑家パウザニアス、偽造者、文献学者。どの場合でも、神話は真理としてとらえられていたのである。

3) 評

本書の意義として、これが新たな歴史理論の実践であることをまず挙げたい。「脱西洋・近代科学中心主義」のお題目は随分前から巷に溢れている。だが、実際に新理論の適用までこぎつけたものはまだ多くはない。

本文中の論点から、宗教学への問題提起となるものを拾ってみると、

1. 宗教学史上の古代ギリシアの位置付け

従来は、神話信仰が混在し、科学として不徹底だから宗教学ではないという意見と、当時はまだ科学と非科学の区別はなかったから、前史に置いてよいという意見が対立していた。しかし、筆者に従えば、科学VS神話の図式でギリシアをとらえる事自体、啓蒙主義の嫡子である宗教学の一方的解釈である。

2. 信仰の概念

ここでのギリシア人の信仰様式が、世俗化社会や日本のそれに類似しているのに注意したい。西洋的な信仰概念からは中途半端としか言いようのない(シンクレティズムとは別

で、意識としての)信じ方である。だが、西洋型信仰以外にもっと信に様々な形態を認め、比較していく必要があるようだ。

3. 日常生活と宗教の関係

筆者の言うように、宗教は日常の一部か、それとも日常から隔絶し、質的に異なるものか。

次にこれらの問題を、人間科学一般の方法論へと関連させてみる。

1' 立論の規準 専門家からは、本書の各所での史実・史料解釈が、実証性に欠け、恣意的極まりないと異議があがるかもしれない。事実、筆者自身が自論を検証不可能な想像だといっている。しかし、彼の真理観からは、実証主義もまた想像力の産物に過ぎず、それ自体は無根拠なのである。この相対主義の、西洋近代批判としての意義は認める。だが真理が多元的なら、歴史はどんなものでも構わないのだろうか。筆者は、時代のありのままの姿を明るみに出す歴史学を正しいとする。でも、筆者が本当に何の型もはめずに済んでいるかということ、疑問である。

2' 歴史的被拘束性の対自化 信仰様式が現代と似ていたという2の発見は、実は現代的信仰様式を、ギリシアの中に意識せずに読み込んでいたということはないか。つまり、我々は自分でないものをそのまま理解できるか(自分と同じ部分しか分からない、いや、自己の投影物を見ているに過ぎない)という問題である。なぜなら、筆者は解釈と単なる認識を分けるが、認識には既に(下部構造の規定としなくても)何かしらの解釈は含まれているからである。筆者が実はなおも近代的枠組みから逃れていないのを、示すと思える例はまだある。「真理と認識する対象を信じる」という認識観に近代主義の匂いはしないか。あるいは、科学VS神話の対立を否定しながら、未開人特有の原型思考というのを挙げているが、これはレヴィ=ストロースも逃れきれなかった、文明——未開の近代的図式を越えたものなのか。筆者には、自分自身を明るみに出す作業が先に求められているのではないか。

3' 生活世界と学問の関係　しかし、2が、思想的レベルの信仰論ではなく、民衆を含めた当事者の意識の面からアプローチし、生活世界に根差していることは重要である。3と合わせ、現象学的ともいえる。史料を駆使しつつ具体的な姿に迫る過程は、実証主義と関係なく経験的である。3の后者によくある、日常-非日常、コスモス・カオス・1モスの図式を使う画一的な説明により、ずっと説得力があるかもしれない。だが他方、偶然の累積としての筆者の歴史変動論は、人間不在である。主体は構造の前に消えてよいかが、ここでも問われるであろう。また、法則を避けて発明能力という概念を用いているが、それは近代以前の生態史観とどう異なるのか。より一般には、ギリシアと筆者自身の歴史学はどう関係するのか。非近代的歴史学として両者

は重なり合う所が多いようだ。この点の反省なしには、近代主義の超克はないのではないか。知の自己還帰性を無視した筆者の自称おもしろ歴史学は、生活世界から遊離した知的遊戯に終わってしまう。学問は社会に係わるべきでないと判断を停止するのもいいが、では近代主義の批判は、社会に影響を与えずに済まされるのか、いや、近代主義が学の領域のみならず、社会構造と不可分の物なのであれば、与えないようなもので批判となるのか。学問に中立性は不可欠だが、それは学と生活世界の関係に対し言及を避けるのではなく、自己の立場の明確化=相対化があってこそ守られるように思う。これは旧マルクス主義への逆行ではないはずだ。

本書への批判は、そのまま我々自身の問題として跳ね返ってくるものばかりである。